シャルロット・デュノアの苦悩の日々

ダイ・ハード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャルロット・デュノアの苦悩の日々

【Ｎコード】

Ｎ７３８４Ｓ

【作者名】

ダイ・ハード

【あらすじ】

織斑一夏とＩＳ学園の１年間

織斑一夏とＩＳ学園での１年間（前書き）

初投稿です。出来栄えは悪いでしょうが楽しんで読んで頂ければ幸いです。

織斑一夏とＩＳ学園での１年間

ＩＳ…それは女性にしか反応しない…
たった１人の男子を除いて…

その男子の名は織斑一夏…ＩＳ学園２年１組の唯一の男子生徒…いや彼はこの学園の生徒・教師…売店の定員や事務員などを含めこの学園の関係者で唯一の男性である。
よって彼はライオンの群れの中に放りこまれた１つの肉片のように全学年の生徒による恋愛争奪戦の対象となっている。
普通の男子高校生ならこの環境は夢のようだと喜ぶところだが…彼はこの環境を『キツイ』という３文字で表している。
確かに彼は毎日、朝から眠りにつくまで様々な国の美少女たちから様々なアタックを受けている。
例えば野球が大好きで野球部に入る。しかし毎日練習をしていれば１週間前後できつくなるだろう…勿論例外はあるだろう…しかし彼は女性が大好きなわけではない…もちろんある程度の興味はあるがそんな生活が１年続けば彼が根をあげるのも無理はない。

シャルのお願い

「なぁ…シャル…」
「なにかなぁ～もしかして今更謝るつもりなの？」
「うっ…」

なぜシャルが怒っているかというと…
話しは昨夜にさかのぼる。

「一夏～」
「んっ！？シャルか、どうした？」
「え～と…あのね…その明日付き合ってくれない？」
『よし！言えた！！』

「あ～悪い。明日は五反田と遊びに行く約束してんだ…」
「えっ…あ…そ、そうなんだ…」
「悪いなシャル…」
『あ～あ…せっかくの日曜なのになぁ…』

そうして次の日俺は五反田と遊びに行ったのだが…

「じゃあな～」

「お～またな一夏。ハーレム生活をたのしめよ～」

「バ～カ」

といった感じで僕らは冗談?を言って別れた。

『やっぱり男同士ってのもいいよな…』

そんなことを考えていると。

「一夏さ～ん」

「セシリア!?どうしたんだこんな所で。」

「少し買い物をしていたんですの…一夏さんはなぜここに?」

「俺は中学校の友達と遊びに行ってたんだ。」

「そうなんですの…あのもう帰られるのですか?」

「あぁ一緒に帰るか。」

「よ、よろしいのですか?」

「一緒の場所に帰るんだから別に良いだろ?」

「はい!!喜んで!」

そうして2人で帰ってきたところをシャルが目撃してーーーー

ーーー今に至る…

「なぁ…シャルロットさん…許してくれよ…っていうかセシリアとは偶然会っただけだぞ」

「セシリアに聞いたら『とても楽しかったですわ。』って言ってたもん！」

「…セシリア…何言ってんだよ…なぁシャル…どうしたら許してくれるんだ？」

「じゃ、じゃあ僕のお願いを聞いてくれたら許してあげる。」

「ほんとか！何だ？お願いって！？」

「えっと…その…あのね

シャルのお願い　2

次の日曜にね…僕とその…つ、付き合ってくれたら許してあげる…」

最後のほうは消えてしまいそうなくらい小さな声だったが…シャルは勇気を振り絞り一夏をデートに誘ったのだ……が

「何だそんなことか。良いぞ。何かシャルの雰囲気がいつもと違うからさ、恐ろしいお願いとかされたらどうしようと思ったぜ」

……見事に勘違いしていたのだった…

「一夏……言っておくけどこれは…デ、デート何だからね！……じゃ、じゃあオヤスミ！！」

そう言い残して走り去って行くシャルと……それを呆然と眺めている超鈍感マンこと織斑一夏少年……

『デート！？……俺がシャルと…！？ど、どうしようデートって何をすればいいんだ？』

部屋に戻った彼は思いにふけっていた……
一方金髪美少女はというと……

『今回は今までのデートとは違う……何たって今回は一夏もデートって意識してくれる！！』

彼女もまた部屋に戻り思いにふけっていた……

さかのぼること少し。
彼らが話しをしているとき……

彼らの話しを盗み聞きしている人影が３つあった……

3人の監視者

1つは嫌が応にも目につく金色の髪がトレードマークである英国の淑女
　セシリア・オルコット

彼女はあることを思っていた…

『わ、わたくしがシャルロットさんに意味ありげな失言をしとしまったために、一夏さんとシャルロットさんがデートなさるなんてわたくしのバカ！！し、しかし！過ぎてしまったことは仕方がありませんわ……どうにかしないと！！』

1つは髪をツインテールにしている姿が特徴的な中国の元気娘
　鳳　鈴音

彼女もまたあることを思っていた…

『一夏とシャルロットがデ、デートですって！？信じられないアイツ！！幼なじみのあたしを置いて他の女とデートなんて！！こ、こうなったら…こうなったら……ど、どうしよう！？』

またもう1つは、銀色の髪をゆったりとおとしている独国の女神

ラウラ・ボーデヴィッヒ

彼女もまたあることを思っていた…

『シャルロットが私の嫁とデートだと！？どうやら嫁には調教が必要なようだ…しかし…シャルロットと嫁がこのままデートするのをただ指をくわえて見ている訳にもいくまい！！こうなったら…』

そして3人は顔を見合わせ決意を口にした。

「「「2人を尾行する！！」」」

一方、一夏とシャルは3人の決意など知るよしもなくただ授業を聞き流していた…

かくして日曜日すなわちデートの日がやって来たのであった…

2人っきり（!?）のデート〈1〉（前書き）

色々事情があってしばらく投稿できませんでした。

これからはきちんと投稿できるよう頑張りますのでよろしくお願いします。

そして話の方ですがちょっと長めに書いてみました。

2人っきり（!?）のデート〈1〉

ＩＳ学園は外出禁止の全寮制である。
よって外出する場合には担任もしくは副担任から外出許可をもらわなくてはいけない。

なのでシャルロットは職員室に来ていた。

「失礼します。織斑先生は居ますか？」
するとビシッとスーツを着ている織斑千冬が……ではなく主に１年生を指導している先生が近づいて来た。

「織斑先生さっき出張に行ったのよね～……」

その先生はお菓子でも食べていたのか…口の回りにお菓子のかすをつけて、すまなそうにそう言った。

「あっ！そうなんですか…あの～じゃあ山田先生はいますか？外出許可をもらいに来たんですが……」

するとその先生は辺りをきょろきょろと見回しある場所を見て指差した。

「山田先生ならあそこにいるわよ。」

指差した先にはパソコンの画面とにらめっこしている山田先生がいた。

「おはようございます。山田先生。」

「あらっ、デュノアさん！？おはようございます。どうしたのですか？」

山田先生はパソコンの画面から目をはなしシャルロットを見つめて言った。

その外見は同年代と言われれば信じてしまうぐらいの童顔で……童顔で身長も生徒と変わらないのに…ある一部分がとてつもなく大きくて…僕もあのくらい大きければ一夏を悩殺したり……わぁぁーーー！！僕は何を考えているんだ！

「あの～デュノアさん？」

「あっ！すいません。それであの、外出許可をもらいたいんですけど…」

「はい。外出許可ですね。」

ーーーーそうしてシャルロットは外出許可を手にして、部屋に戻り、昨日１時間かけて選んだ服を着た。

時刻は午前９時……一夏とは駅に１０時で待ち合わせとしている……

『ここから駅まで３０分ぐらいだからそろそろ行こうかな…』
そう思いシャルは部屋を出た。

……一方お相手の織斑一夏少年はと言うと…

「えぇっ！！もう９時半じゃん！？やべー遅れる！！」

朝、シャルと同じように山田先生に外出許可をもらい、部屋に戻った時はまだ９時前だった…
だから彼は服を選んだり、髪を手入れしていたーーーー

ーーーー「ごめん！待った！？」

「ううん。今来たところ。」

会話だけで言えばよくあるデートの待ち合わせで聞かれるセリフだろう……男と女が逆でなければ……

「嘘つかなくていいよ…９時半に学園出るのを見たってラウラが言ってたぞ……ごめんな」

「あはは、ばれてたの！？正直に言うと…１０分ぐらい待ったかな～……でも一夏ちょっとしか遅れてないし……ねっ！気にして

ないよ！！…それより……」

『なんでラウラが見てたの！？僕学園の裏門から見られないように出たのに……』

シャルロットは学園の正面玄関から同じ時間帯に一夏と出ると、怪しまれてつけられる可能性があると思い、人気が少ない裏門から出たのだった……

「ありがとうシャル。シャル？お～いシャル？」

気づくと一夏が自分の顔を心配そうに覗いていた。

「あっ！何でもないよ。」

慌てて自分の両手を顔の横で降る。

『ラウラは偶然そこにいたんだろう……今は一夏とのデートを楽しまなくちゃ！！』

「じゃあ行こうかシャル。シー・ズー・パークに行きたいんだよな。」

「うん。そうだよ。じゃあ行こう一夏」

説明しよう！

シー・ズー・パークとはｓｅｅ・ｚｏｏ・ｐａｒｋと書き文字通り水族館と動物園が合体したものでその広さは、〇京ドーム１０個分というとてつもなく広い場所なのである。

そして２人を追う３つの影が……

2人っきり（！？）のデート〈1〉（後書き）

何か思いつきで書いてるからこの先の展開がカオスな状態なんだよね……

はぁ…これからどうしようかな～…

2人っきり（！？）のデート〈2〉

「んで、どうすんの？」

鈴は頭をかきながら隣に座ったまま獲物（？）を見つめている2人に声をかけた。

「私は今からあの2人に加わる。」

そういうとラウラはすたすたと歩いて行こうとする。

「お待ちなさい！ラウラさん。まずはあの2人を追跡してあの2人の情報を手にいれることが先でしてよ！」

「そうよ！アンタいきなり行って加わるって、バカじゃないの！？」

ラウラは足をとめてあたしたちの方を見た。

「確かに戦地でも敵の情報収集は大切とされる。しかし！お前たちも聞いただろう？シャルロットはデートとはっきりと言ったのだ。これは由々しき問題だ。よってこれ以上の情報は必要としない。私

は嫁を連れて帰り自分がどのような立場であるか分かってもらう必要があるのだ！」

そういうとラウラはまた歩き出した。

「ちょ、ちょっとストップ！とにかく今はまだ行かない方がいいの！それよりアンタが一夏のことを嫁呼ばわりしていることも問題なんだけど……」

「2人とも！2人がいませんわ！」

「「えっ！？」」

ーーーー僕は幸せだ。

一夏と2人きりで出かけることは今までもあった…

でも、その時は一夏はデートなんて意識せずに恥ずかしいとも思わずに手も握り自然に色々話していた。

でも今日の一夏は手をつなぐ時も緊張でガチガチになっていたし、シー・ズー・パークに着いて一時間以上たった今も緊張しているのは目に見えている。
頬は朱色に染まり目を左右にきょろきょろと動かしている。
その姿がとても可愛く見えて、シャルロットは胸がキュンとなってしまうのだった。

それにしても今日の一夏の挙動不審ぶりを見ているとシャルロットは少し悪戯したい気持ちがわいてきた。

「ねぇ一夏……腕組んでいい？」

「う、う、腕！？」

一夏は大げさだろ、と、ツッコミを入れたくなるほど驚き声が上ずってしまう。
だがシャルロットは攻撃の手をゆるめない。

「だってデートだよ。腕ぐらい組んでもいいよねぇ。」

そういうと彼の二の腕に自分の腕を巻き付けギュッとした。

「ちょ、シャル！む、胸が当たってるって！」

反撃がきた！しかも強力な反撃が！
シャルロットは耳たぶまで真っ赤になりお決まり（！？）の言葉を叫んだ。
館内中に響き渡るような声で……

「一夏のエッチーーーー！！」

ーーーーさかのぼること5分前。

「ちょっとアンタが変なことしようとするから一夏たち見失ったでしょ！どうすんのよ！」

「どうする？探すに決まっているだろう？まぁお前だけ学園に帰っ

てもいいぞ。私は嫁を取り返し、調教をする必要があるからな、お前がいれば邪魔になるだけだ。」

「ちょっとアンタ人を挑発する言い方しかできない訳？だいたい尾行中は休戦にしようって言ったでしょ！？アンタ何1人で抜け駆けしようとしてんのよ！！」

「2人とも落ち着いて下さいまし。今はあの2人を見つけるのが先ですわ！」

「「うっ…分かった〈わよ〉」」

鈴とラウラは顔を見合わせふんと鼻を鳴らしそっぽを向いた。

「全く…そんなに時間は経っていないし遠くには行ってはいないと思うのですが……」

すると近くとも遠くとも言えない距離から聞き慣れた声で聞き慣れた言葉が耳に飛び込んできた。

『一夏のエッチーーーー！！』

３人は顔を見合わせ声のした方に走っていくのだった…

2人っきり（！？）のデート〈2〉（後書き）

何とか今週も乗りきった感じです。

次の話かその次の次の話で一区切りしようと思います。
まぁ予定なだけでずるずる続くかもしれませんが……

2人きり（!?）のデート〈3〉

「なぁ…シャル…機嫌直せよ……なっ。」

「そうだぞ。シャルロット…元気を出せ。」

「ちょっアンタ、バカ!?なんでアンタが…」

「もういいよ鈴……」

「ごめん。シャルロット…」

「申し訳ありませんでした…シャルロットさん……」

アタシたちは今、シー・ズー・パークの入り口付近のベンチにシャルロットと一夏を座らせ、シャルロットをなだめているところだーーーー

ーーーーさかのぼること10分前ーーーー

アタシたちはシャルロットと思われる叫び声を聞いて声の方へ走った。

そして2人を見つけた時にシャルロットとばっちり目があってしまった。

「えっ…どうして鈴が？ってセシリアとラウラも……」

「えっ！本当だ。なんでお前らこんなとこにいるんだ？」

ヤバいと思ったが良い言い訳が全く見つからなかった。
そこで後ろの2人に助けを求めた……けど、こともあろうかアタシと目を合わせようとしない…

『アタシにどうしろって言うのよ……』

アタシが頭をフル回転させて言い訳を考えていると、

「お～い、お前ら聞いてんのか？」

「な、な、なによ！」

しまった。慌てたせいで声が上ずってしまった。

「だから、お前らがなんでここにいるのかって聞いてんだよ。」

「うっ…そ、そう！3人で遊びにきたの！そしたらなんか叫び声が聞こえたから…走ってきたのよ！」

よし！何とか乗りきれると思って2人を見ると、一夏は上手く騙せたみたいだったが……シャルロットを見た瞬間、背筋がゾクッとした。
シャルロットは目に涙をいっぱい貯めて、今にも目から溢れてきそう……あっ！溢れた！！

「シャルロット……？」

「うっ、うっ、」

ついに泣き出してしまった！

「シャルロット、ごめん！」

「ええ～ん。」

それからは周りを気にせず泣き叫ぶシャルロットをあやすのが大変だった…

ーーーーそして今、2人に全ての経緯を話して、膨れっ面のシャルロットに謝罪中……

このことで分かったことだけど、

普段大人しい人は怒ると、とても怖い。

2人きり（！？）のデート〈3〉（後書き）

これでとりあえず一区切りついた……

次はまだ登場していないメインヒロインを中心に話を作ろうと思っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7384s/

シャルロット・デュノアの苦悩の日々

2011年5月29日11時02分発行